

今年の「文化で滋賀を元気に！」するプロジェクト

今年の調査研究・提言のテーマは、滋賀を創造活動の場として選んだアーティストと地元地域との出会い、そして交流によって見出される地域の魅力、新たに生み出される文化の可能性と道筋を考えます。

企画提案・事業コーディネーター

企画推進員

十倉 良一、藤原 昌樹



■ 考えたこと

滋賀では県外から多くのアーティストが移り住んでいます。しかし、制作の場にするだけで作品の発表や展示、販売は大阪、京都とするケースが多く、滋賀がアーティストや作家から、創造活動を支える拠点として選ばれていることが、あまり知られていないというのは残念なことです。

まず、昨年度の「文化で滋賀を元気に！賞 2017」を受賞した風と土の交藝プロジェクト（※）の活動に注目したいと思います。高島市に移住してきた工芸作家らが工房を公開し、地域の住民や遠来の訪問者と交流するイベント『風と土の交藝 in 琵琶湖高島』を2011年から続けています。この取り組みに触発されて、移住アーティストと地域の交流がもたらす文化の可能性について議論しては、と考えました。

文化は出会いや対話によって刺激され、旧来の枠組みが揺さぶられることで、新たなものを生み出します。滋賀は古来、京大坂に近く、東国と都を結ぶ街道がいくつも通ること、多くの文化人が往来してきた「地の利」があります。

主要な都市で芸術振興が伸び悩み、地方に注目が高まるなか、もっと県外からアーティストを受け入れる姿勢をアピールしているのかもしれない。

- 創作活動を応援し発信しやすい環境をつくる。
- アーティストは、長い歴史と文化が深くしみ込む滋賀の地域に目を向け、関わることで新たな創作の可能性をつかむ。
- 地域の方でも、アーティストの活動や創作に触れ、交わることで多様な文化に彩られる。

こうした相互の刺激、双方向の作用が期待できないでしょうか。どうしたら、そうした好循環をつくり出せるのか、知恵を働かせ、チャレンジを呼び掛ける提案ができないのでしょうか。



『風と土の交藝 in 琵琶湖高島』でアーティストの工房を訪ねる来場者

■ 議論したいこと

- * 移住アーティストの台所事情、生活と制作の経済
- * 芸術文化への関心を広め、その窓口を担う人、場所
- * アーティストがもたらす～見る聞く触る、感覚を開いて～不思議を考える喜びの評価
- * 地域のメリットとは。
次世代への刺激、子どもの教育・遊びへの影響
- * 移住アーティスト+地域・経済→ビジネスは可能か。
例えばアート作品を手頃な価格で買えるメッセを、一般の人が集まる商業施設などで開けないか。

(※)

2011年から高島市内に拠点を持つ手しごと作家たちの工房や住まいなど、暮らしをめぐるオープンアトリエ型の催し『風と土の交藝 in 琵琶湖高島』を開催。来訪者（風の人）と移住した作家（風の人）、地域の作家（土の人）、地域住民（土の人）が、その暮らしや作品を通じて交流することで見出される高島の魅力を発信している。



山里暮らし交房 風結い

第11回文化ビジネス塾

「文化で滋賀を元気に！賞 2017」を受賞した風と土の交藝プロジェクトチームの方を招いて、高島市で取り組んで来られたプロジェクトについて話題提供いただき、移住アーティストと地域の交流がもたらす文化の可能性を探ります。提言に向けた最初の公開ディスカッションになります。会員以外の方の同伴も可能です。皆さんの参加をお待ちしております。

日時 7月28日（土）10:00～12:00

場所 山里暮らし交房 風結い（高島市安曇川町中野 795-3 JR安曇川駅から徒歩10分）

内容 風と土の交藝プロジェクトの事例発表と意見交換

参加は無料ですが、会場の都合により定員30名となっております。参加を希望される方は、

7月25日（水）までに文化・経済フォーラム滋賀事務局（電話 077-523-7146）へお申し込みください。

会員交流① 会員の皆さんから情報・話題を提供していただくページです

滋賀でコンサートに行く お勧めはこれ！

井上 建夫 (草津市)

コンサートへ行きたいなと思った時、私がまず手にするのが、クラシック音楽情報誌『ぶらあぼ』だ。コンサートホールやCDショップに毎月20日頃に無料で置いてあるので、これを入手して翌月の公演情報をチェックする。翌月以降の情報は『ぶらあぼ』WEB版があって、コンサート検索で調べることができる。試しに7～12月の滋賀のコンサートを検索すると19件ある。えらく少ないが、これは編集部へ情報が届くにつれ増えてくることになる。

とりあえずこの19件の中から私のお勧めが守山市民ホールの「ルシオール音楽塾」だ。(私は守山市民ホールの企画に関わっているので手前ミソな話になって恐縮です。) 専門家のお話と実演を組み合わせた講座形式の3回シリーズで、音楽評論家など専門の講師陣に、演奏は、日本センチュリー交響楽団メンバー、びわ湖ホール声楽アンサンブルのOB・OGメンバーなど気鋭の中堅・若手奏者が中心だ。取り上げられる作品はブラームスの



弦楽六重奏曲第1番、ヴェルディの『リゴレット』(ハイライト)、ロマン派ピアノ曲集と、感性にぐぐぐと訴えかけるロマン主義の名曲を揃えたラインナップだ。ダメ押しは、チケット各回800円(セット券2,000円)といううれしい価格。これに行かない手はない。

そして『ぶらあぼ』に載っていないコンサートのお勧めも一つ。オペラ制作の際に稽古での伴奏や歌手のコーチを務めるコレペティトウアとして、びわ湖ホールをはじめ第一線で大活躍中の岡本佐紀子さんが、ピアニストとして意欲的なコンサート・シリーズを始めている。『紡ぐ音』と題され、岡本さんがソロあるいはゲストを迎えてのアンサンブルをする。会場は大津市内のミニホール、奏美ホールだ。私は4月の第2回(高岡奈美さんのチェロとでフォーレの作品)を聴いたが、インティメット(intimate)かつ緊迫した素晴らしい演奏会だった。このシリーズの夏の特別編(ピアノ連弾)がラフマニノフや近代フランスの作品で開催される。1,2メートル先に奏者の息づかいが聞こえるコンサートだ。

井上 建夫 (個人会員) 守山市民ホール総合プロデューサー

〇ルシオール音楽塾

第13回 ロマンティック・ブラームス 9月2日(日)14時開演

講師:中村孝義 演奏:日本センチュリー交響楽団団員

第14回 ヴェルディ『リゴレット』 10月21日(日)14時開演

講師:青山登志和 演奏:びわ湖ホール声楽アンサンブル・ソロ登録メンバーほか

第15回 ピアノのロマン主義 12月16日(日)14時開演

講師:岡田暁生 演奏:幡谷幸子

すべて守山市民ホール小ホール

各回800円(25歳以下500円)(セット券2,000円)

〇『紡ぐ音』(夏の特別編) 川口真由子&岡本佐紀子ジョイントリサイタル ~ピアノ連弾の珠玉を集めて

曲目:ラフマニノフ/ピアノ連弾のための6つの小品

ラヴェル/マ・メール・ロワほか

8月5日(土)14時開演 奏美ホール 2,500円

なぜ、「安土」なのか？

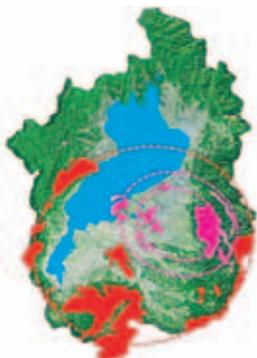
藤野 滋 (東近江市)

以前から不思議に思っていることがある。なぜ、戦国の覇者・織田信長は天下の中心に安土の地を選んだのだろう。

もちろん、湖上水運を利用できることは大きなメリットだ。でも、安土山が面していた内湖(現在は干拓されている)はあまり深くなく、今のよう水位の調整が自在でなかった当時において、渇水時にどの程度使えたものだろう。また、軍事的にも尾根続きの織(きぬがさ)山から見降ろされる形となり、あまり気持ち良くない。そして何よりも疑問に思うのはあれほど華やかで贅を尽くした建物であるにもかかわらずその姿を望みできる場所が極めて限られることだ。交通の大動脈であった中仙道からは織山が壁となってほとんど見えず、琵琶湖からは稜線が背景の山並みの一部となり、目立たない。

信長の命により禅僧が記した「安土山ノ記」はこの城に関する信長の意図が直接反映された唯一の根本史料である。そこには織山につながる無名の小山を信長が発見し、その結果、その山は「太山(偉大な山)」になったとある。さて、信長は一体、安土山の何を発見したのだろう。

2001年、安土城跡天主台の物理的レーザー探査が行われ、驚くべき事実が判明した。天主台造成面の数m下は平らに削られた岩盤であり、それが基礎の役割を果たしている可能性が高いという。地質の研究者によれば安土山を含む湖東地方の山塊の多くは約7千万年前



琵琶湖コールドロン (ピンクが湖東流紋岩)

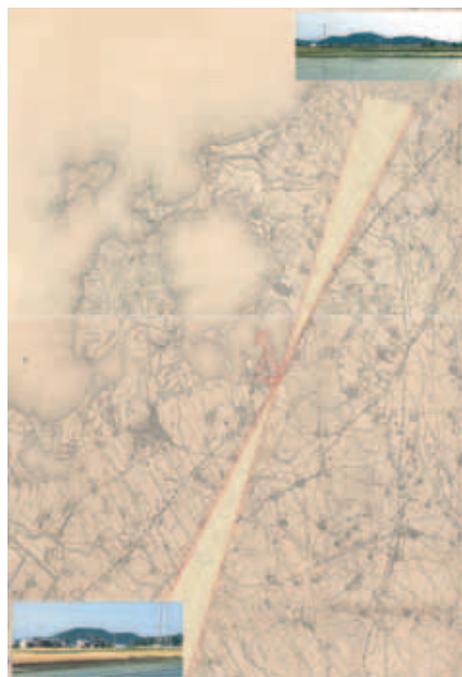
の白亜紀に起こった火山噴火によって形成(湖東コールドロン)された「湖東流紋岩」からできており、この岩石はとて固く、割ると方形となり、強固な石垣を築くのうってつけの石材となる。

信長が発見したのはこの湖東流紋岩の「岩盤」であり「石」ではなかったか。宣教師などを通じて壮大な高層建築物の存在を知っていた信長にとって、最大の難関は広大な構築物を支える基礎であったろう。その基礎工事を必要とせず、石材の調達が容易な安土山は信長にとってまさに「太山」であったに違いない。

信長自身が命名したと考えられる「安土(安らかな土)」という地名。この地名にこそ、信長がこの地を選んだ理由とその格別の遊びが込められている。珍説・奇説? あえて識者の見解を俟つ。

藤野 滋 (個人会員)

藤野商事株式会社代表取締役社長、滋賀経済同友会副代表幹事



安土山を独立峰として視認できる範囲

会員交流② 会員の皆さんの活動等を紹介していただくページです

文化（社会）と文明（経済）の交差点に立ち続けるために

法人会員 琵琶湖汽船株式会社 代表取締役社長 川戸 良幸（大津市）



芸能の祖神「蟬丸」を現代によみがえらせたいという想いを胸に始まった「関蟬丸芸能祭」。写真は、今年5月27日（日）に開催された第4回芸能祭の様子と、主催の関蟬丸神社芸能祭実行委員会会長として神社の再興に取り組む執筆者。

背景：琵琶湖・竹生島

私は、考えます。文化に沿って文明が創生され、文明に沿って文化が創生され、文化と文明が互いに絡み合い（DNAの様に）、刺激し合って来た時間軸の上で、人間は、進化し成長してきたのではないかと。

文明がものすごい勢いで時を刻み、そして考えもつかないような技術が次々と生み出されているのが現在であり、文明はこれからも留まることなく流れ続け、その速度は、加速を続けていくのではないかと。

一方、主に、自然と人間の交流の中で築かれてきた文化は、人間と自然との交流の輪が小さく成りつつある現在において、文化力の減少が懸念される。加えて、“自然に見放された人間は生きていくことはできない”という当たり前の事実も震んでいると思います。

そして、私は考えます。文化と文明の両輪、そしてその良きバランス状態が、豊かな暮らしを私達に与えてくれるのではないかと。

そこで、私は、琵琶湖に船を浮かべています。「近江八景巡り」「琵琶湖一周島巡り」など、これらの観光に共通することは、いずれも、琵琶湖の一部の観光ではなく、人々と琵琶湖が創り上げてきた「神仏の世界」を含む、琵琶湖自身を「異世界」とした人々との交流の歴史と文化を観光として人々に伝えています。琵琶湖という一番長く大きな自然は、人と共に紡いできた文化の物語を語ってくれます。琵琶湖の語る物語に耳を傾けることが、文明と文化の調和した、生き物としての人間の優しい未来を育むきっかけになるのではないのでしょうか？

人を運ぶことを生業としている私達は、琵琶湖を通して、人間が忘れてはいけない「自然と人間の関係、生きていく暮らしの豊かさの中に創られる文化」をお伝えしていきたいと考えています。

近江の原風景を撮影中

個人会員 長井 泰彦（写真家、大津市）



写真を撮り続けて35年になりました。比叡山山麓にあたる大津市仰木平尾地区の通称翁が谷（おきがだん）で、一本桜の丘や馬蹄形の棚田の辺りの自然豊かな美しい光景に接したのをきっかけに、日本の原風景とも言えそうな風景を撮り歩いています。四季の美しさに魅せられて上仰木一帯はもちろん、湖西・高島市の針江浜から海津浜に至る浜辺、さらに湖東、湖北、湖南と巡り歩き、四季の「原風景」を撮ることがいつの間にか自分のライフワークになっています。



この間、「郷・紀行」のタイトルで写真の個展を京都市や大津市のギャラリーで開いて湖国の原風景の美しさを多くの人に見ていただいています。また、カレンダーも毎年出し続けてきました。個展は8回に、また、カレンダーは23年連続となり、自分の足跡をたどる上で大きな財産となっています。個展がきっかけで、（公財）びわ湖芸術文化財団から発行されている季刊文化雑誌「湖国と文化」から声がかかりました。写真仲間2人に呼びかけて3人で同誌のグラビアを引き受けることとなり、「郷（さと）紀行」シリーズを展開しています。撮影するだけでなく、個展やカレンダー、雑誌などを通して、とても美しい近江の風景を多くの人に見ていただけるのは、カメラを愛する者にとってこの上ない喜びとなっています。

そんな時に、文化・経済フォーラム滋賀の存在を知り、誘いを受けて7年前に会員になりました。文化・経済フォーラム滋賀の魅力はなんといっても、経済界や行政、ボランティアなど、多彩な人々と気軽に会えることです。そこで、講演会や文化ビジネス塾での講座、勉強会などに積極的に参加するようになり、これまで知らなかったような世界のことを勉強させてもらっています。その経験を自分の作品作りに生かしたいと思っています。

これからも色々な人と出会い、知識を学び、湖国滋賀をいろんな角度から見て、撮影活動を続けていきます。湖辺や里山で撮影姿を見かけましたらぜひ声をかけて下さい。一緒に湖国の豊かな風物を楽しみましょう。



連載 レポート近江屋考

「きのう、きょう、あす」 ③

歩くブログ記者 岸野 洋

京都新聞社友、前・(公財) 滋賀県文化振興事業団理事長



お店は地下鉄東西線の門前仲町駅を降り、交差点から永代橋通りを深川不動尊へ行くにぎやかな商店街の中にあつた。正式な町名は東京都江東区富岡 1-8-18。ケンタッキーの右となり、金文字の「酒」扁額と、屋号の「近江屋本店」の看板がかつている。店前に高倉健さんが愛し、日本サッカーの長谷部主将がサブリ代りに飲むという甘酒、当店おすすめの奈良漬、鹿児島の本格芋焼酎などが並んでいる。

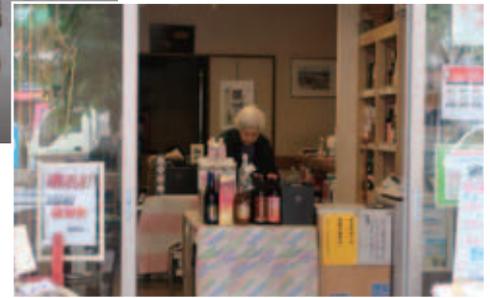
店内に入って、白髪の女性が店番していて、歩くブログ記者の名刺と、近江商人特集が載った今年冬号(162号)の季刊誌「湖

国と文化」を出して、立ち話でお店のことなど聞いた。

この店の当時の女将、寺田夏子さんが写真付きで、情報誌「りっぷる淡海」(1998年 vol.5)の連載「全国近江屋巡り」⑤に載っていた。店番していた女性によると、掲載の写真は傘寿の時、昨年、白寿の99歳で天寿を全うしたという。夏子さんは近江八幡市出身で、お父さんが学校教員。お姉さんと同級生だった御主人と結婚して、初めて東京へ来て、夫婦で酒屋さんを始め、戦前から戦後へ空襲、疎開など経験して、ご主人に早く先立たれたが、夏子さんは時代に遅れないようコンピューターなど導入、お店を続けてきた。情報誌にはそんなことが書いてあつた。

歩くにつけ、見るにつけ「近江屋」と表示が出ていと気になる。看板に足が止まり、広告チラシなどにも目が行く。東京江東区、深川不動尊のある門前仲町に酒屋さんの「近江屋本店」がある。県が20年前に発行していた情報誌「りっぷる淡海」に載っていたのを知っていたので、東京へ行ったおり、アポなしで、ぶらりと訪ねた。

夏子さんが切り盛りしたお店は、息子さんの代になって、すでに80年を過ぎ、門前仲町という東京の下町、「近江屋本店」として溶け込んでいる。店番の白髪女性が娘さんかどうか、確認しなかったが、お店には夏子さん掲載の情報誌が大事に保存してあるという。滋賀のことは、日本橋にアンテナショップ「ここ滋賀」が出来たことは知っているけど、近江八幡の親戚などは遠くなり、行き来することはないという。酒屋さんだし、お店の中に近江の地酒はあるかな〜と見まわしたが、置いてなさそうなので、間くと、東北の地酒がお客に好まれて、どこからも言われてないので…。日本橋の「ここ滋賀」では、近江の蔵元のお酒が揃っており、この店にも〜と、寂しい気がしたが、いつか、その日が来るかも〜と、持参した近江商人掲載の季刊誌「湖国と文化」を差し上げて辞した。



後援事業のご案内

和太鼓サウンド夢の森 2018

日時: 8月4日(土)

場所: 甲賀市鹿深夢の森(文化創造のステージ)

甲賀市甲賀町大久保 507-2

内容: 県内外のアマチュア和太鼓グループとプロのチームによる和太鼓の野外コンサート。フィナーレには恒例の「100人太鼓」が行われる。

問合先: 和太鼓サウンド夢の森実行委員会 080-9714-9783

古庭園・大人ライブ Vol.43 「庭と音楽II」

吉田 誠 クラリネット・ソロ・コンサート

日時: 9月22日(土)・23日(日)

場所: ながらの座・座

大津市小関町 3-10 電話 077-522-2926

内容: クラリネットの新たな魅力や可能性の発見に挑戦するコンサート。演奏曲はバッハ〜近・現代まであまり演奏されない曲を取り上げ、「耳で視る躍動、目で聴く歌」の面白さを表現する。

問合先: 詳しくはホームページ <http://nagara-zaza.net/>

第7回滋賀県ヤング写真展覧会

日時: 9月30日(日)~10月7日(日)

場所: 甲賀市あいこうが市民ホール

甲賀市水口町水口 5633

内容: 県内に在住、通学、通勤する20歳以下の出品者を対象とした写真展。

問合先: 滋賀県写真連盟事務局 077-582-4706

■ 新幹事の就任

福永忠克氏に代わり、5月10日付で浅見孝円氏(滋賀県県民生活部長)が幹事に就任しました。

■ 2018年度企画推進員(11名)

秋村 洋 (株) ブラネットリビング代表取締役
 角間 利昭 (株) しがぎん経済文化センター文化事業部次長
 加藤 賢治 成安造形大学芸術学部准教授、附属近江学研究所副所長
 門脇 宏 滋賀県立大学地域共生センター COC+推進室
 COC+推進コーディネーター
 黒田 秀子 NPO 法人ひこね文化デザインフォーラム事務局長
 谷山 友彦 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール副館長
 辻本 長 滋賀県立文化産業交流会館副館長
 十倉 良一 京都新聞社論説委員
 中村 順一 文化・経済フォーラム滋賀副代表幹事
 深井 俊秀 甲賀高分子(株) 執行役員 経営企画管理室長
 藤原 昌樹 彫刻家
 *五十音順、敬称略
 任期は2019年の総会終結時まで

文化・経済フォーラム滋賀 第9回総会・講演会は、
 2019年2月17日(日)
 びわ湖大津プリンスホテルで開催いたします。

[発行・問合せ] 文化・経済フォーラム滋賀 事務局
 〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 15-1 びわ湖ホール内
 電話: 077-523-7146 FAX: 077-523-7147 bunka-keizai@biwako-arts.or.jp
<https://www.biwako-arts.or.jp/rd/bunkakeizai/>